

講演「北朝鮮人民の生活―脱北者の手記から読み解く実相」

(要旨、日韓文化交流基金 NEWS84 号に掲載)

2017年10月25日

伊藤亞人氏 (東京大学名誉教授)

北朝鮮をめぐるマスコミが連日のように取り上げ、危機感がかきたてられている。しかし今こそ北朝鮮問題とは一体いかなる問題なのか冷静に問う姿勢が求められる。誰にとって、どのような脈絡と関連において、短期的あるいは長期的に、そして現実的な展望も視野に入れて問題の全体像を念頭におく必要がある。はたしてこの問題に対する日本における認識と関心はどうであろうか？ 両国間の交流と情報の欠如、イメージと不安ばかりが先行する状況こそ問題であろう。東アジアにおける位置づけ、国家の枠組みを越えた人道的視点も含めて、日本の立ち位置と展望をさぐる努力を怠ってはならない。

北朝鮮社会の状況について、人間社会の一つの姿として総合的 (holistic) にとらえ、動態的で実践志向的な洞察と理解が求められており、この点で人類学的視点による地域社会と生活者に焦点をおいた研究が生かされよう。北朝鮮社会の現状も、半島北部の生活基盤と地政的条件のもとに、外部からの政治的介入と影響を通して歴史的に形成されてきたものである。地政的な特性、植民地介入の遺産でもある鉱工業や電力・化学工業の優位性、ソ連・中国の勢力を背景にした社会主義化と南北の戦乱と休戦下の軍事体制、ソ連の体制崩壊にともなう経済破綻など、世界史的で大陸規模の課題が凝縮されている。

社会主義社会が踏む過程とは、その制度が機能した初期状況から、やがて機能不全をきたして逆機能ともいえる閉塞状況に陥り、その結果、改革開放か体制移行に迫られるか、あるいは崩壊に至る過程に至るようだ。北朝鮮も社会主義化の過程で、理念の先行、ソ連モデルの制度導入、党・政府の正統性と指導性、思想行動・情報・教育の統制など、同様の過程を踏んできたといえる。社会像を革命の遂行と闘争の過程と位置づけ、社会主義建設のための全体主義が強調されてきた。公式制度の人為的導入と既存の社会文化伝統の否定、過去との断絶、社会と人生の再定義なども明瞭である。住民生活に対する規制も、時間・空間、経験・知識・情報など全般に及び、社会体制の維持・再生産のため、日常の組織生活と政治学習を通して、党に対する忠誠と集団主義による課題遂行のため人民が動員され、“総和”(総活)によって点検がなされてきた。

こうした社会の実態を把握する上で、公式制度と情報に拠る制度論的アプローチ・国家アプローチが何より有効であるが、その限界も弁えなければならない。社会主義社会における非社会主義的側面つまり是非公式領域をどのように読み取り位置づけるかが課題となる。社会主義化にともなう構造的なディレンマを内包した社会の“実態”にどのように迫ることが可能であろうか。その実態が明らかにされない状況のもとでは、この体制から離脱してきた脱北者の生活経験と彼らがもたらす情報は大変貴重である。社会の圧倒的多数である人民の主体に鑑みるなら、インタビュー調査の限界を踏まえるためにも、彼らの生活者

としての主体的な参与が欠かせない。そこで筆者は、本人たちに自身の生活経験をできるだけ具体的に書き記すことを勧め、テーマや書き方や内容をできるだけ本人の主体性に委ねることにし、余裕を持って協力できるように3年間に亘って、その間にほぼ毎月面談できるような態勢で臨んだ。主として対象としたのは、自分の生活をふり返って書き記すことができる時間と精神的な余裕のある年長世代とし、具体的な生活記録を残すことの意義を自覚してもらい、その手引きとして私自身が1972年当時に韓国農村で観察記述したものを示した。そうして得た手記は450篇に及んでいる。

北朝鮮社会主義の公式制度として、朝鮮労働党の党員と幹部の地位と権限、党による指導体制として組織生活における集団主義の実際、政治学習、職場団体（社労青、職盟、女盟、農勤盟、人民班）、総和の実際、人民の成分と資格、管理統制機関（保衛部、安全部）、所有と経営の制度、労働配定、職業の世襲、計画経済の体制、供給と配給体制、課題の遂行、動員などについて、実際の様子が伝わってくる。

一方、公式制度の機能不全にともなう非公式領域の拡大、自力更生の拡大と現状、供給体制の不全・破綻による動力不足（電力、原油）および生産資材の不足による地方軽工業の稼働低下の結果、生活物資や農業物資（肥料、農薬、営農資材）が枯渇する中で、収買制度による資材原料の補填（廃棄物資、中古品、家畜、採取物、家庭の手工芸品の買い取り）に加えて、様々な自力更生（自体解決）の実相が記されている。

自力更生としては、企業所・工場による原料基地の拡大、副業地、副業船、副業班、8.3消費品の製造、さらには意欲的な個人による請負事業や、額上計画とよばれる職場外経済活動の容認などの実態が示されている。さらには、不法耕作（菜園の拡大、山間での小土地開墾）、家庭婦人による家内班、市場（チャンマダン）における商い・物々交換・行商（中古品、廃品、手工芸品、食物、家内畜産、流出品・盗品）、さらに協同や雇用による自営業の発展（食堂、食品加工、運輸、旅館、貿易、倉庫業、家内工業、サービス業、漁業、炭鉱、高利貸し、流通・卸業、工場製品・闇物資の売買）、あるいは、相互扶助慣行（タノモシ、モアモックム、契トン）の実態が見えてくる。とりわけ、市場における女性たちの私的商活動、配給物資や工業製品の取引の発展と公然化、当局による統制の試み、さまざまなブローカー（トンジュ、ムルチュ、テコクンなど）や仲買、卸業、請負、高利貸し、口利き、さらには公的な貿易による外貨事業との連携などの実態は、目覚ましいものがある。それと同時に様々な盗みの蔓延（農作物、食物、家庭の家畜、工場の物資、付属品...）、賄賂や贈物による公式の地位・権限との連携、物資の流用・横領などの実態も伝えられている。

これら生活者の手記を通して浮き彫りとなるのは、社会主義の原則に沿って公式制度が厳しく指導・管理されている一方で、住民が生活の防衛策として切り拓いてきた非公式領域である闇の行動領域の実態であり、反社会主義・反党・反革命的として糾弾されていたものが、やむを得ない事情として黙認・容認され、やがて半ば公然化するに至った状況である。社会主義の制度が機能不全に陥り、もっとも基本的な食料の配給まで滞った危機的

な状況では、党の指導による総和も形骸化し、人々は生き抜くため果敢に行動してきた。

社会主義の原則による公式の社会制度は、それに反する非公式な関係や手段によって支えられ、両者は不可分な一体をなしているとみてよい。計画経済の体系は実質的に破綻し、あらゆる物資が非公式に生産され、市場に出回り、あるいは交換されることで、新たな物資供給状況が生まれていると見てよい。政府はたびたび対症的な規制緩和に迫られてきたが、社会主義の体制と秩序を維持する原則を崩さず、社会主義から移行すべき新たな体制について明確な展望を提示できないまま、新たな状況を追認することで問題の緩和に追われてきたといえる。一方で人々は、的確な状況判断によって公式と非公式を弃えた行動が求められ、未知の領域で可能性を探りながら、経験を積んで変身を遂げ、新たな生活力を身に付けている。公式と非公式が一体化して、社会全体がいわば運命共同体的ともいえる体制に精緻化が進んでおり、その内旋 (involution) ともいうべき状況が国際的な孤立のもとでどこまで持続可能か注目されよう。北朝鮮社会の今後を理解する上で、圧倒的多数を占める人民の生活実態を踏まえることが先決であり、真摯な取り組みが求められている。

詳しくは、拙著『北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相－』（2017年、弘文堂）を参照されたい。

(了)